大阪狭山市文化財報告書33

大阪狭山市内遺跡群
発掘調査概要報告書16

平成18年（2006年）3月

大阪狭山市教育委員会

大阪狭山市文化財報告書33

大阪狭山市内遺跡群
発掘調査概要報告書16

平成18年(2006年) 3 月

大阪狭山市教育委員会

序　　文

大阪狭山市内には大阪府の史跡名勝に指定されております狭山池をはじめとして、数多くの文化財があります。狭山池では治水ダム化工事に伴う発掘調査によって多くの遺構、遺物が出土し、東樋・中樋等が大阪府の指定文化財となりました。平成13年３月にオープンした大阪府立狭山池博物館では、この発掘調査の成果を中心にした展示が行われ、多くの方々にご観覧いただいております。

本市教育委員会では、平成2年度より個人住宅などの建築に伴う発掘調査を継続的に実施してまいりました。本年度は狭山藩陣屋跡、池尻城跡などの周知の埋蔵文化財包蔵地で発掘調査を実施し、貴重な成果を得ることができました。本報告書はこれらの調査成果をまとめたものです。本報告書が地域の歴史を考えるうえでの一助となれば幸いです。

調査にあたりましては、建設主の皆様ならびに近隣の皆様に多大なご協力を賜り厚く感謝いたします。

今後とも本市文化財保護行政に対するご理解とご支援のほどを、よろしくお願い申し上げます。

平成18年(2006年)３月

大阪狭山市教育委員会
教育長　岡　本　修　一

例　言

１．本書は国庫の補助を受け、大阪狭山市教育委員会が平成17年度事業として大阪狭山市内で実施した個人住宅建築等に伴う埋蔵文化財の緊急発掘調査の結果をまとめた概要報告書である。

２．本書に収録した調査は以下の通りである。

　　１・池尻城跡　　05－１区

　　２・狭山藩陣屋跡　05－１区

３．発掘調査は大阪狭山市教育委員会社会教育・スポーツ振興グループ市川秀之が担当した。現地調査においては鳥山文夫・米澤孝成・古西健治ら各氏の協力を得た。

４．内業調査については市川秀之が担当し、若宮美佐・橋本和美・笹岡裕里子ら各氏のご協力を得た。遺物の撮影は有限会社阿南写真工房に依頼した。

５．本書の執筆・編集は市川秀之が担当した。

本 文 目 次

（頁）

序文　　大阪狭山市教育長　岡本修一
例言
はじめに…… 1

１・池尻城跡…… 4
　　05－１区…… 4

２・狭山藩陣屋跡…… 5
　　05－１区…… 8

報告書抄録…… 19

はじめに

大阪狭山市内では1960年代以降に急速な人口増加が生じ、南部の丘陵地に狭山ニュータウンが建設されるなど住宅開発が進んだ。1980年代以降はひところの勢いは衰えたものの、現在でも小規模な開発は盛んに進められている。また近年では1960年代～70年代に新築された住宅の建て替えが行われており、これらに伴って発掘届提出数や発掘件数は微増の傾向にある。ことにここ数年は狭山池周辺の整備やさやま遊園跡地の住宅開発、府道の整備などが進められ、その周辺でも住居の移転や建て替えが頻繁に行われるなど、狭山藩陣屋跡における開発が多く、発掘調査についてもこの地域が中心となっている。

大阪狭山市内の遺跡分布および地形分類は図１のとおりである。大阪狭山市は西側の泉北丘陵と東側の羽曳野丘陵にはさまれた場所に所在しているが、この二つの丘陵の間に何本かの南北方向の谷筋が走っている。これらの谷筋からは旧石器時代・縄文時代の打製石器が発見されているが、当該時期の明確な遺構を伴う遺跡は確認されていない。

弥生時代の遺跡としては市域南部の高地において弥生時代後期の高地性集落が確認された茱萸木遺跡が知られているのみである。

古墳時代以降の本市域内における人々の活動の痕跡は、近年の発掘調査成果によって除々に明らかになってきている。旧天野川流域の沖積低地に立地する池尻遺跡では、土壙・焼土壙など住居跡の可能性のある遺構とともに庄内式の甕・壺と布留式の甕が出土している。旧天野川右岸の中位段丘面に立地する狭山藩陣屋跡では自然の谷地形の底からTK47型式の須恵器が出土しており、古墳時代中期の集落が段丘面に存在した可能性が高い。また天野川右岸の沖積低地にある狭山神社遺跡でも布留式の甕が出土している。今後沖積低地に存在する遺跡の調査が進むとさらにこの時期の生活が明らかになっていくことが期待される。

古墳時代中期以降、泉北丘陵を中心とした地域に須恵器の生産地である陶邑窯跡群が形成された。５世紀後葉から６世紀前葉までの本市域内における窯の造営は、陶器山丘陵およびその北方に連続する高位段丘のみに限定して分布する。発掘調査が行われた窯跡としては山本１号窯（陶器山252号窯）や陶器山15号窯がある。６世紀後半になると陶邑窯跡群における須恵器生産活動はより活発化し、その分布域は東方にひろがる中位段丘にまで拡大し、小規模な段丘崖や開析谷の斜面でも窯が築造されるようになる。ＴＫ43型式～ＴＫ209型式の須恵器を産出する須恵器窯には、太満池北窯・太満池南窯・狭山池2号窯・狭山池３号窯・池尻新池南窯・今熊１号窯がある。７世紀にはいると本市域内における須恵器窯の数は減少するが、狭山池周辺での生産は継続し、狭山池１号窯・狭山池４号窯・狭山池５号窯・東池尻１号窯・ひつ池西窯などが確認されている。

７世紀前葉、旧天野川が構成した大きな谷に長さ約300ｍ、高さ６ｍ弱の堤防を築き、旧天野川と三津屋川の流れをせきとめ、ダム式のため池とした狭山池が築造された。狭山池における発掘調査では、中樋・東樋・西樋・木製枠工など、各時代の灌漑用施設が検出された。こと

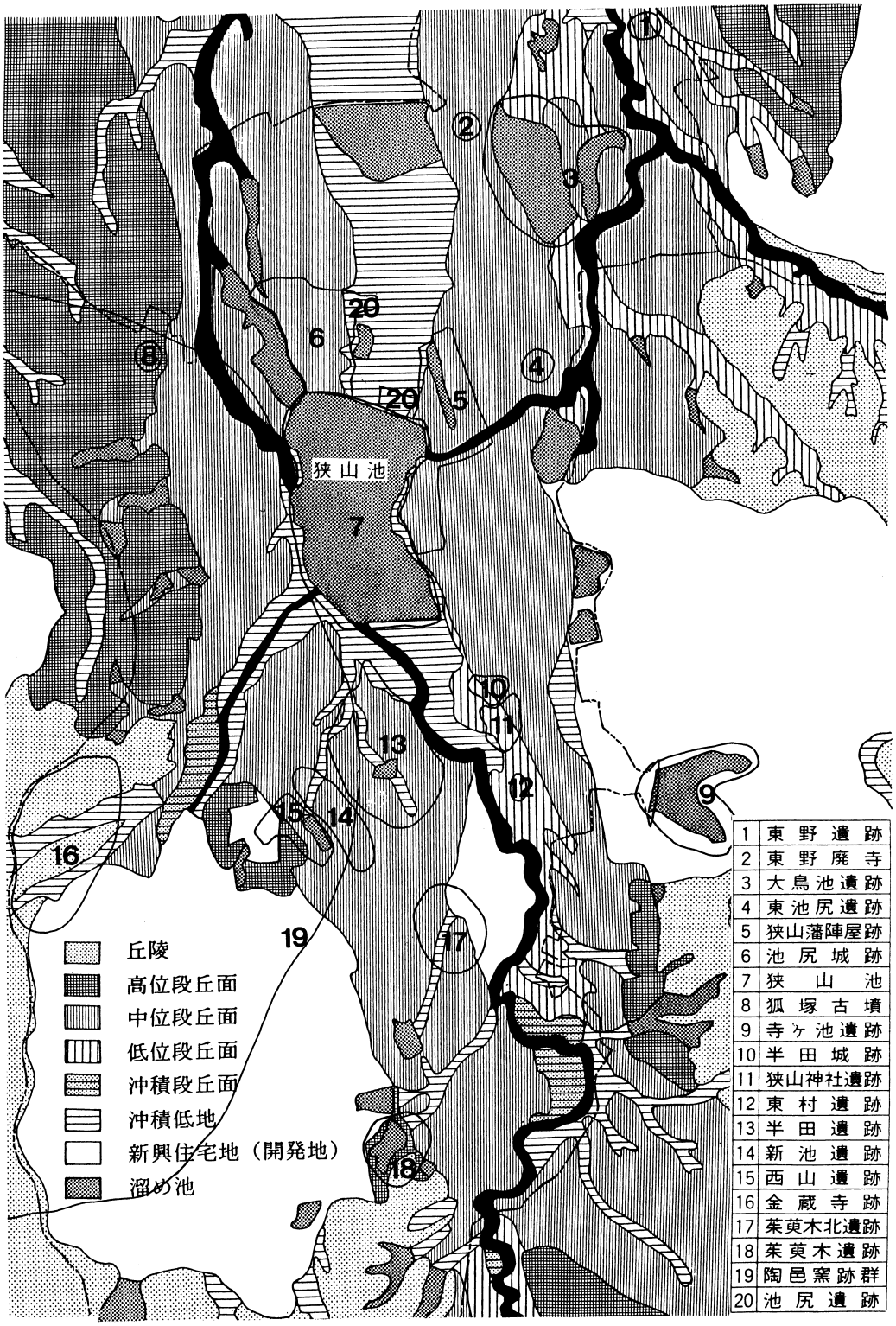


図１　大阪狭山市内の遺跡分布と地形分類

に東樋では狭山池築造時の樋管が検出され、その年輪年代から狭山池の築造年代が７世紀初頭であることが明らかになった。また中樋からは13世紀初頭に僧重源が狭山池を修築したときの改修碑が出土している。狭山池北側の沖積低地に立地する池尻遺跡では重源の改修とほぼ同時期の屋敷跡が検出されている。西除川（旧天野川）両岸の中位段丘上には、７世紀後葉の東野廃寺があるので、狭山池の築造のころから段丘面での集落も形成され始めたようである。狭山池の両側の段丘では中世城館の池尻城跡、中世集落の庄司庵遺跡、古代～中世の寺院跡である狭山神社遺跡、近世城館の狭山藩陣屋跡など、古代から近世にかけての諸遺跡が成立している。

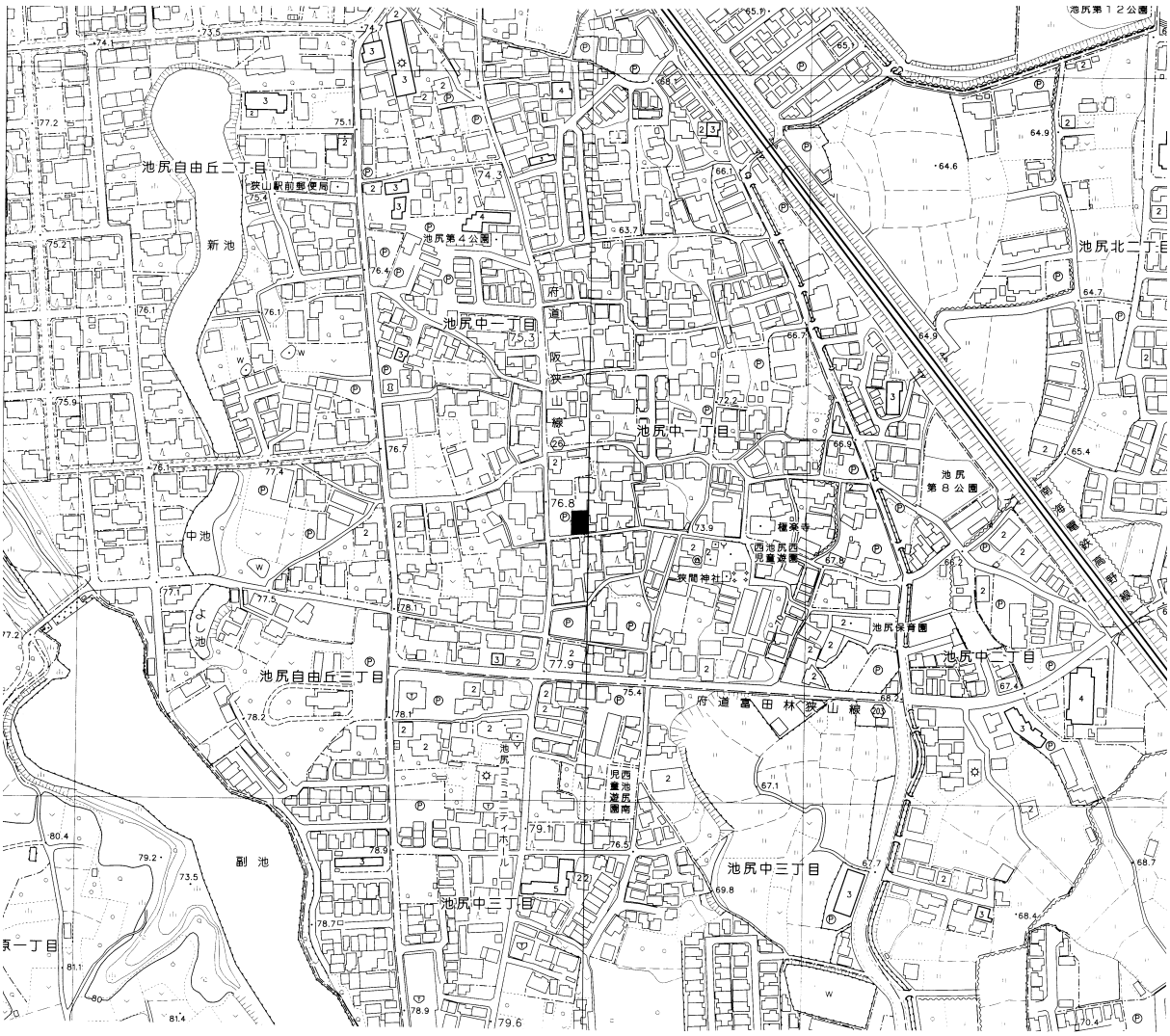


図２　池尻城跡05－１区　位置図（Ｓ＝１・5000）

1・池尻城跡

池尻城跡は狭山池の北西の段丘上に立地する中世の城館遺跡である。南北朝期に池尻で合戦が行われたことはいくつかの史料で確認することができる。正慶２年（1333）後醍醐天皇の蜂起に呼応して、楠木正成が鎌倉幕府に反旗を翻した際、池尻の地頭が楠木勢に追い落とされたことが「楠木合戦注文」にみえる。また建武４年（1337）にも池尻・半田で南朝・北朝の合戦が行われたことが「高木遠盛軍忠状案」に記載されている。さらに正平２年（1347）にも、楠木正行に従った和泉国御家人の和田助氏が、池尻合戦に参加したことが「和田助氏軍忠状」にみえる。このように14世紀の半ばには池尻で数度の合戦が行われたことが史料に見えるのでこの地に軍事的な拠点が存在したことが推測され、また付近にも「古城」などの地名が残存していることから、池尻に城跡があることは古くから推定されていた。昭和60年（1985）、住宅開発に伴って大阪府教育委員会が実施した発掘調査によって、池尻城の中心部と思われる部分において城館の遺構が検出されている。この発掘調査では２時期の遺構が検出されている。

（０５－１区）

調査地は池尻城跡の中核部からみてやや西側に所在地、すぐ西側を南北に下高野街道が通っている。個人住宅の建築に先立って５ｍ四方の調査区を設定して掘削するが、南側の４ｍ程度は解体ガラなどが埋められかく乱さされていたため北側の１ｍ・５ｍの範囲だけが調査可能であった。現状地盤から25㎝下までは最近の盛り土でその下にはレンガが敷かれていた。これを除去してさらに掘り進んだところその下30㎝についても比較的近年の盛り土であった。さらにその下は15㎝については茶色土であったが、これは畑の耕作土と思われる。この層の中から近世の土師皿や平仄、染付碗が出土しているが、いずれも細片で実測できたものは数点にすぎない。遺物は近世後期のものが中心であり、少なくともこの時代には畑とされていたことがわかる。またこの耕作土を除去したところ、黄茶色シルトからなる地山層を検出したが、この面において遺構は検出できなかった。

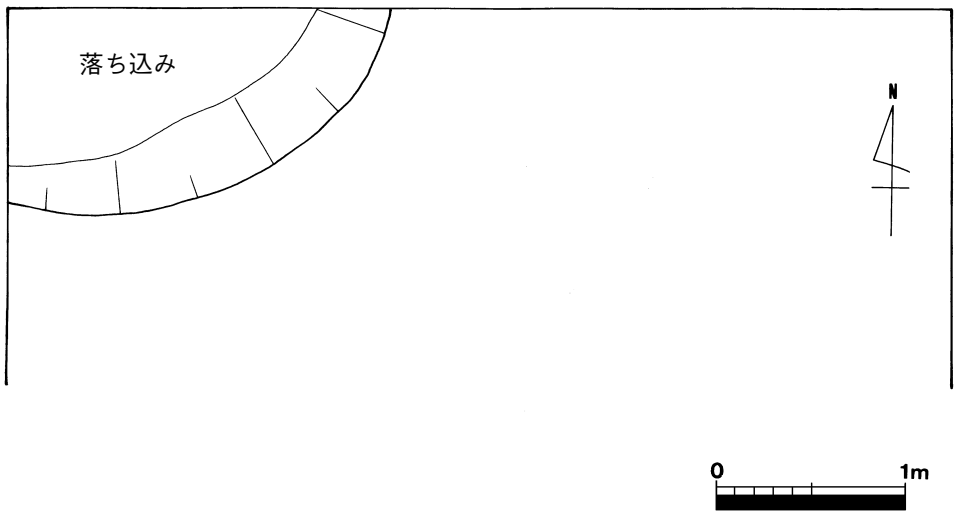


図３　池尻城跡05－１区　遺構平面図（Ｓ＝1/40）

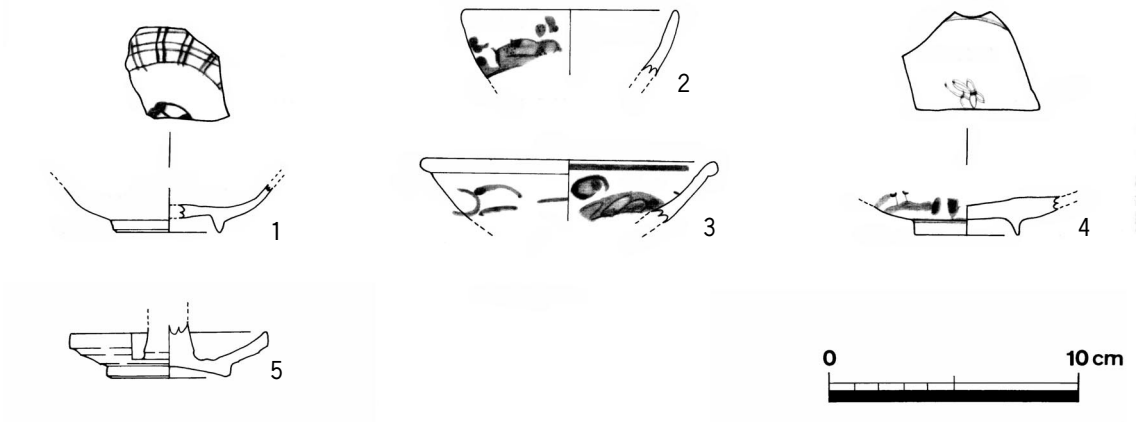


図４　池尻城跡05－１区　出土遺物

２・狭山藩陣屋跡

狭山藩陣屋跡は、狭山池の東側に広がる中位段丘上に立地する近世城館跡である。豊臣秀吉によって小田原城を落とされた戦国大名北条氏の末裔が、元和年間にこの地に陣屋を開き、以後明治維新にいたるまでの間、一貫して陣屋が営まれていた。陣屋は北側の上屋敷と南側の下屋敷にわかれているが、領主の居宅である御殿は上屋敷のもっとも北側に設けられ、その周囲には上層の武士の屋敷が建ち、上屋敷の外周部や下屋敷の北部には下層の武士が居住していた。また下屋敷は狭山池に面した景勝の地であり、藩主の別邸も建てられ、広大な馬場が備えられるなど、居宅が密集した上屋敷とはやや趣きを異にした空間であった。

狭山藩陣屋では1987年以降、大阪府教育委員会や大阪狭山市教育委員会によって発掘調査が行われてきている。いずれも小規模な発掘調査であるが、これまでの調査件数は約80件にものぼり、その成果をつなぎ合わせることによって陣屋の構造が少しづつ明らかになりつつある。これまでの調査では陣屋が建築された近世初期を遡る遺構・遺物はほとんど検出されてこなかったが、平成15年度に大阪狭山市教育委員会が旧さやま遊園地において実施した発掘調査において７世紀前葉の須恵器窯が発見され狭山池５号窯と命名された。現地は発掘調査以前にはまったく平坦な地形と思われていたが、かつては深い谷がありその斜面を利用して窯が作られていた。陣屋下屋敷の造成にあたっては谷を埋めて平坦地を構築する大規模な造成が行われていたことがわかる。上屋敷についてはほぼ全面にわたって上下２層の遺構面が確認されており、出土遺物からみて上層の遺構面は天明２（1782）年の大火以後の遺構面、下層遺構面はそれ以前の遺構面と考えられる。遺構の性格は多様であるが、多くの遺物が検出されているのは家屋の周囲に掘削されたと思われる土壙である。おそらく火災や建て替えの際にこのような土壙に廃品などが投棄されたものと思われる。出土遺物は日常的な生活用品を中心としながらも、硯、水滴などの文房具の出土が比較的多く、武士の生活の一端をうかがわせる。産地は肥前系や堺産が多く、まれに朝鮮半島製のものがある。

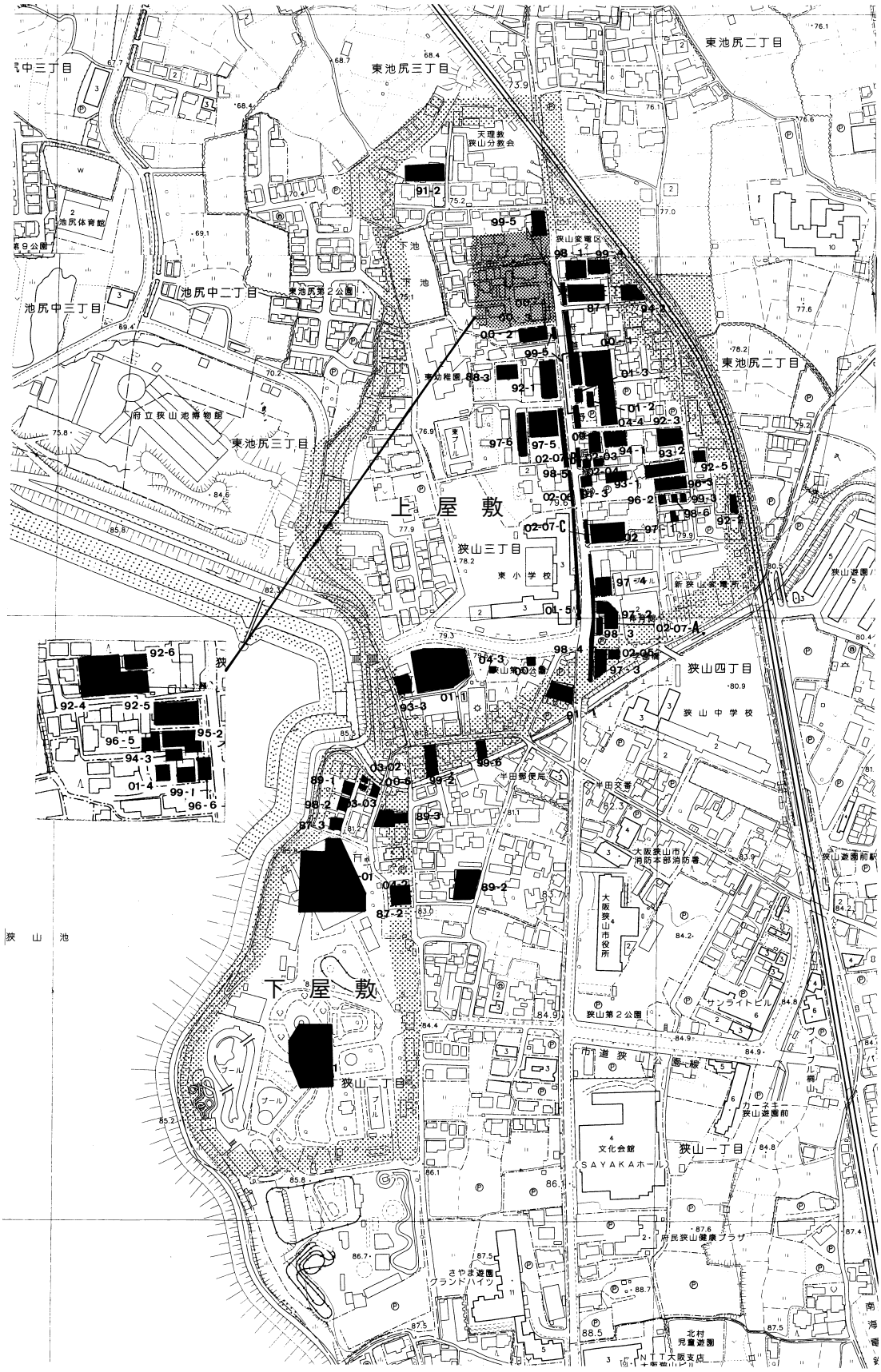


図５　狭山藩陣屋跡における既存の調査箇所（Ｓ＝1/5000）

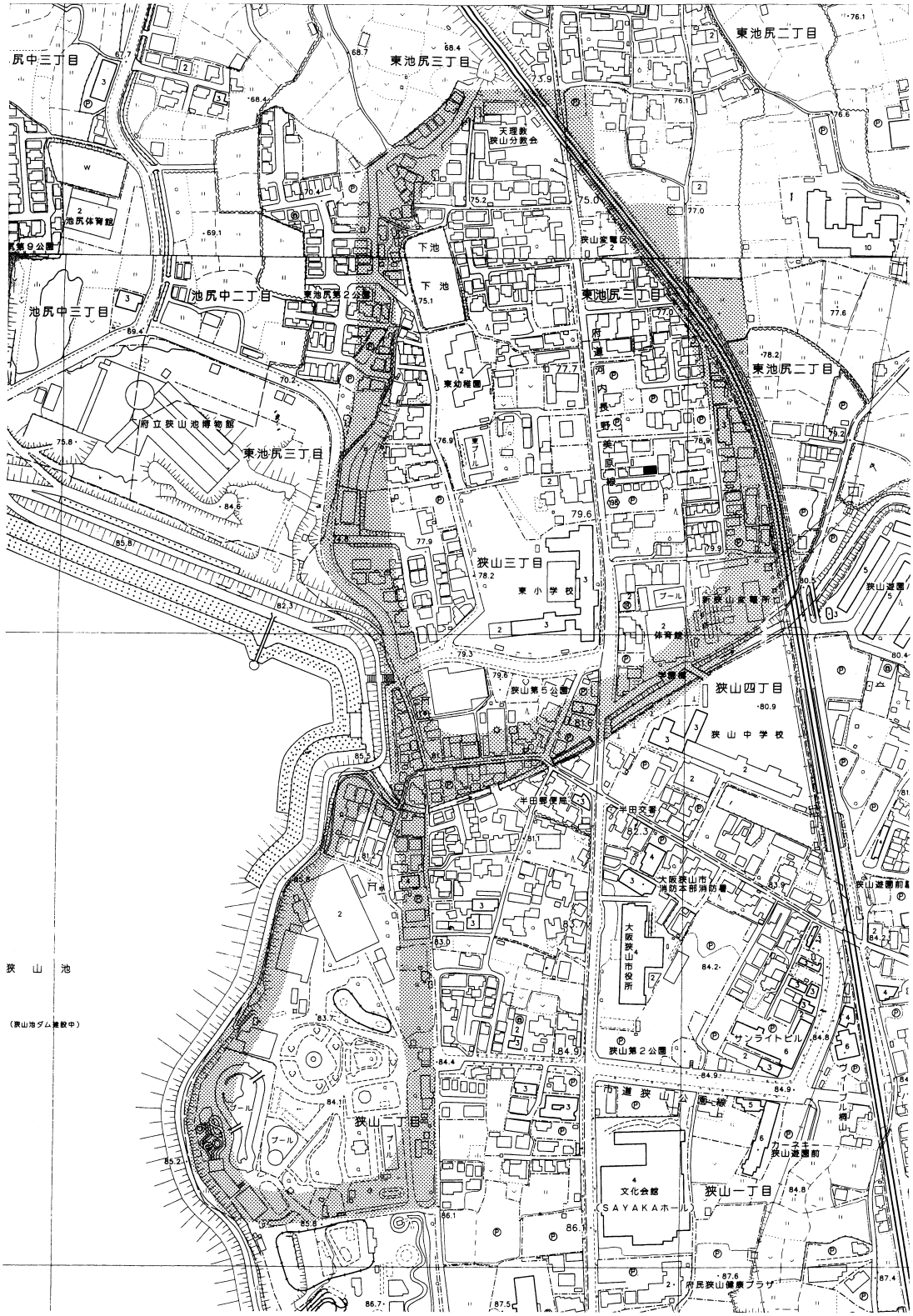


図６　狭山藩陣屋跡05－１区　位置図（Ｓ＝１/５000）

（０５－１区）

調査地は狭山藩陣屋の上屋敷の大手道よりもやや東側に入った場所にあたる。個人住宅の建築に先立って発掘調査を実施した。南北5.4m、東西7.6mの範囲を掘削したところ現状地盤から18㎝下がった場所で黄茶色シルトからなる地山面を検出した。調査区の東端については幅１mにわたって撹乱されていたが、西側については大きく掘り込まれていた。この掘り込みは予想以上に深く建設予定の建物の基礎への影響を考え、調査は東西方向の３本のトレンチを掘削しておこなった。その結果この掘り込みはほぼ南北方向の大きな溝であることが明らかになった。溝は東西4.1mで、深さは最も深い場所で0.8mであった。底の形状はすべてを掘削していないため明らかではないが、北端のトレンチを見る限り２段に掘削されている。底のレベルは北端、南端でほぼ等しく、堆積物からは流水があった様子はみられない。この溝に連続するものはこれまでの調査ではみつかっていないが、屋敷地の境界の溝にしては規模が大きすぎるため、陣屋の東端を区画する溝であった可能性があるだろう。今後の調査で連続した遺構を検出し、遺構の性格が明確となることを期待したい。

この溝の内部からは大量の遺物が出土した。出土した場所は必ずしも底の部分ではないため、溝を埋めるときにこれらの遺物も投棄された可能性が高い。遺物の年代は18世紀が中心であり、天明年間の大火以後陣屋が再構築される際にこの溝は埋められたものと考えられるだろう。

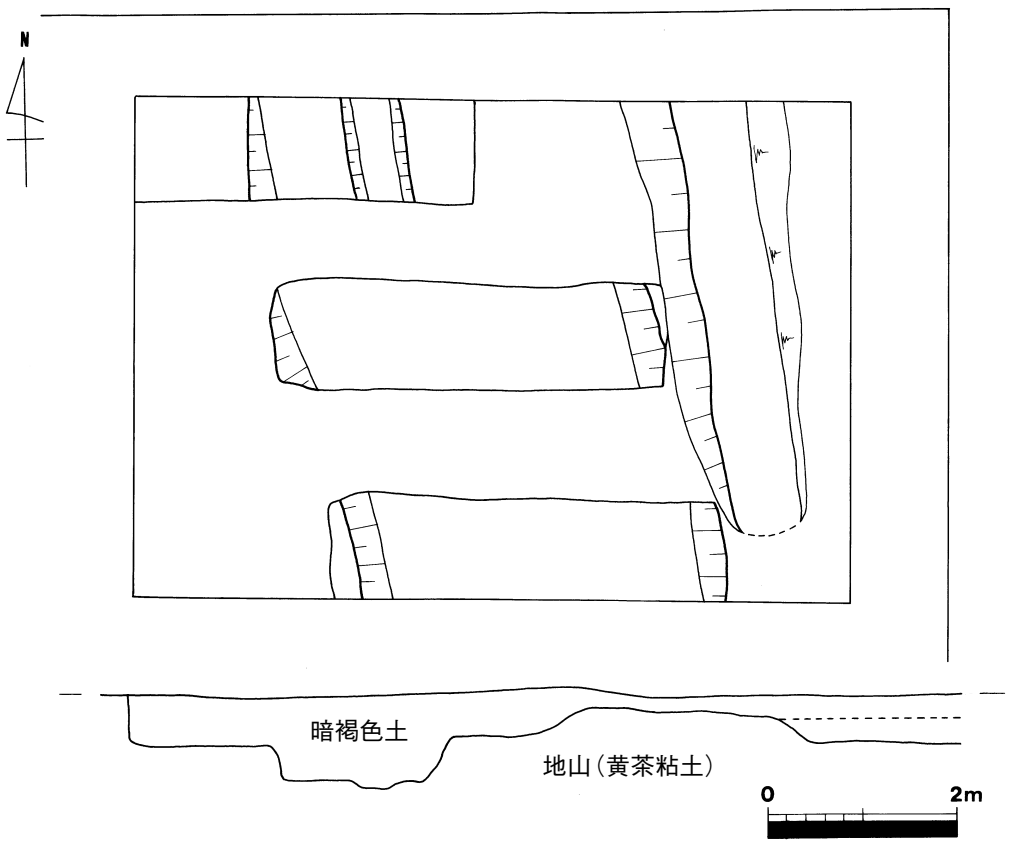
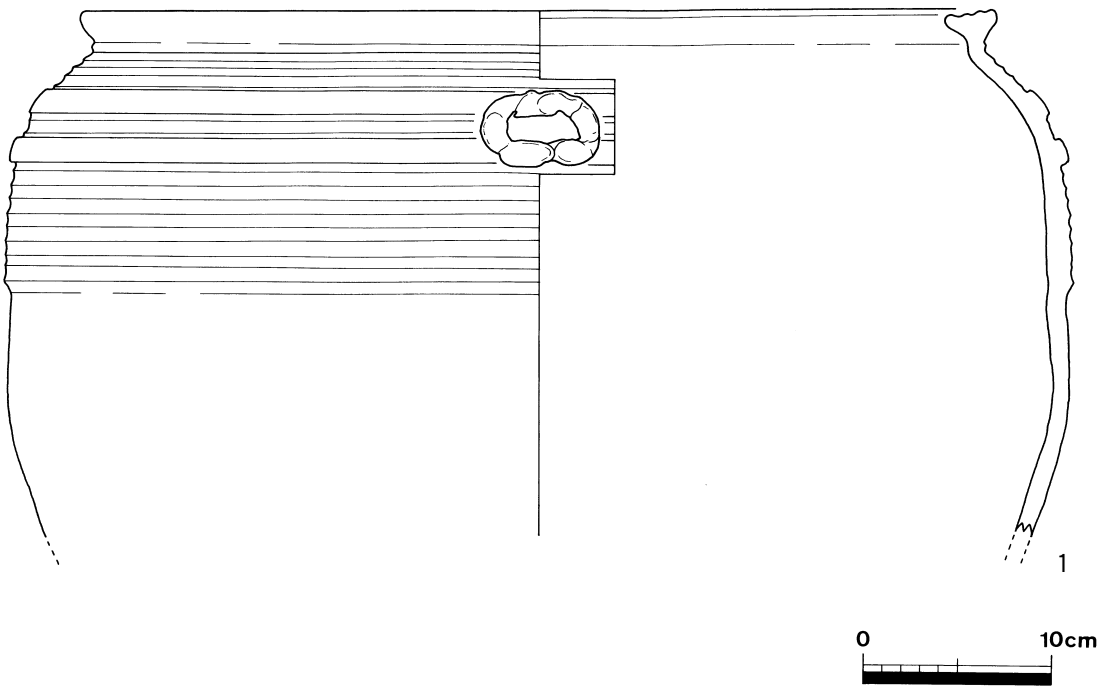


図７　狭山藩陣屋跡05－１区　遺構平断面図（Ｓ＝1/80）



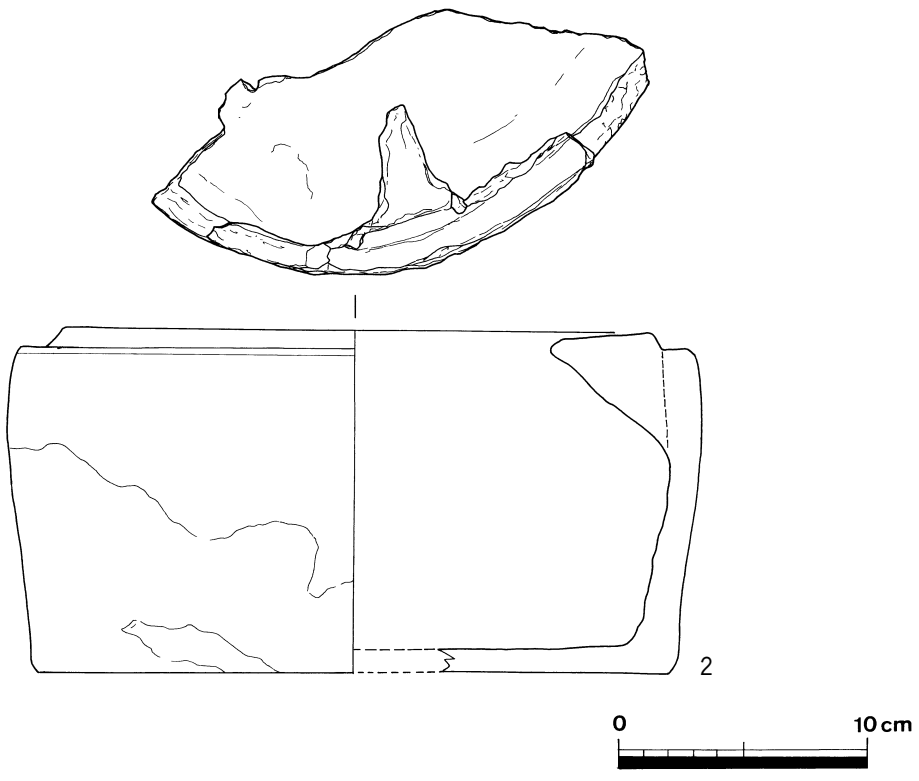


図８　狭山藩陣屋跡05－１区　出土遺物実測図（１）

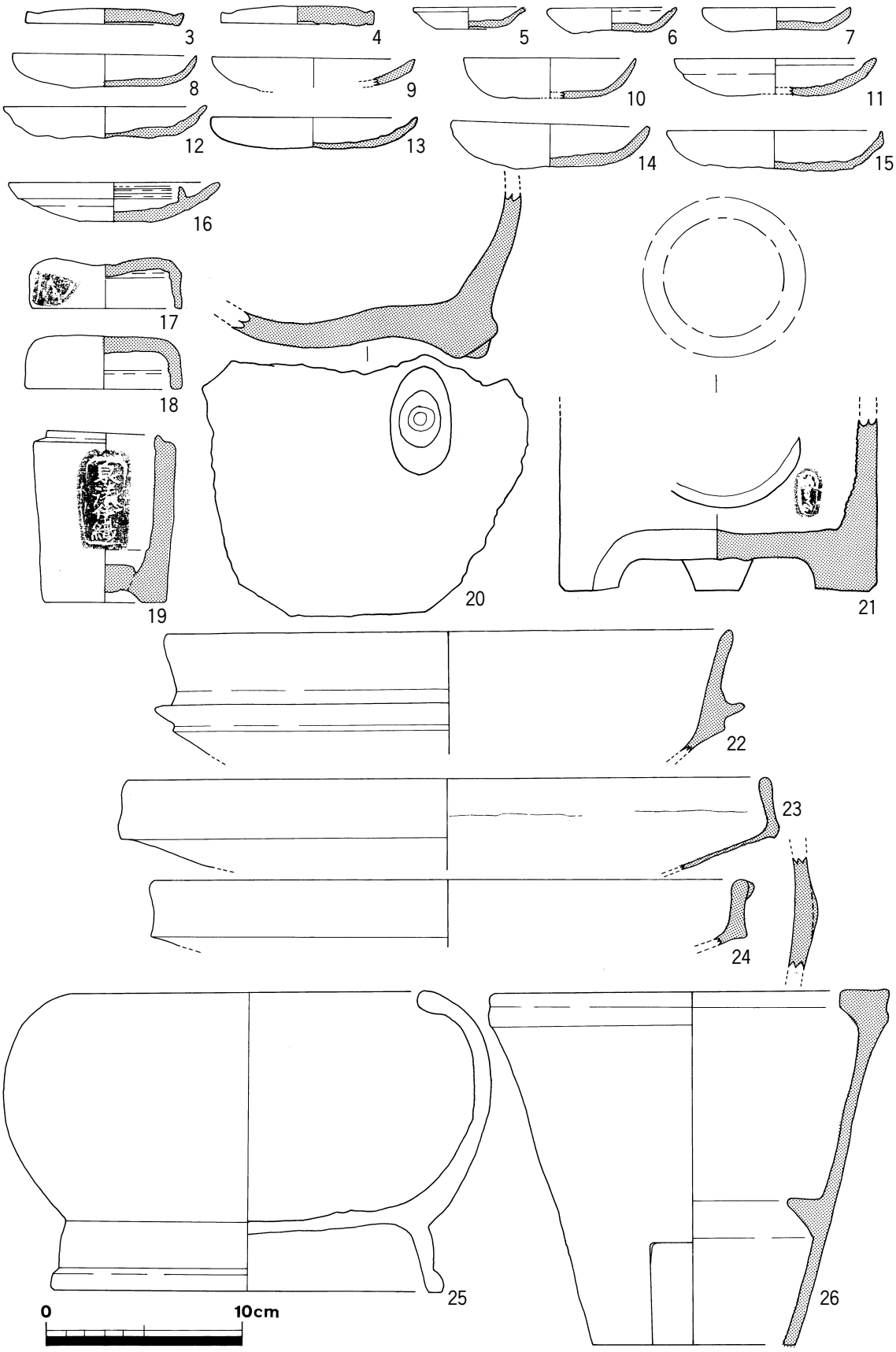


図９　狭山藩陣屋跡05－１区　出土遺物実測図（２）

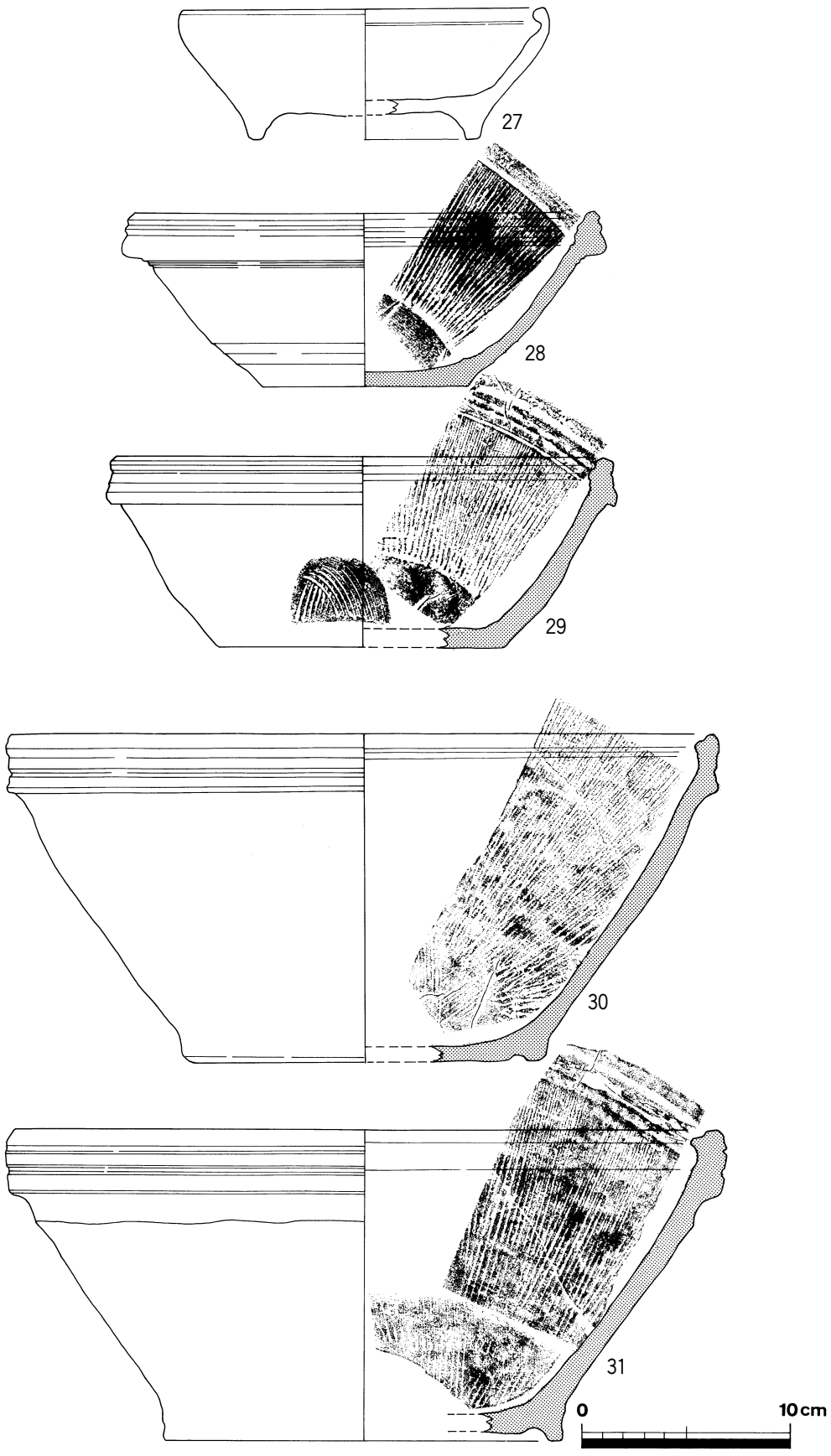


図10　狭山藩陣屋跡05－１区　出土遺物実測図（３）

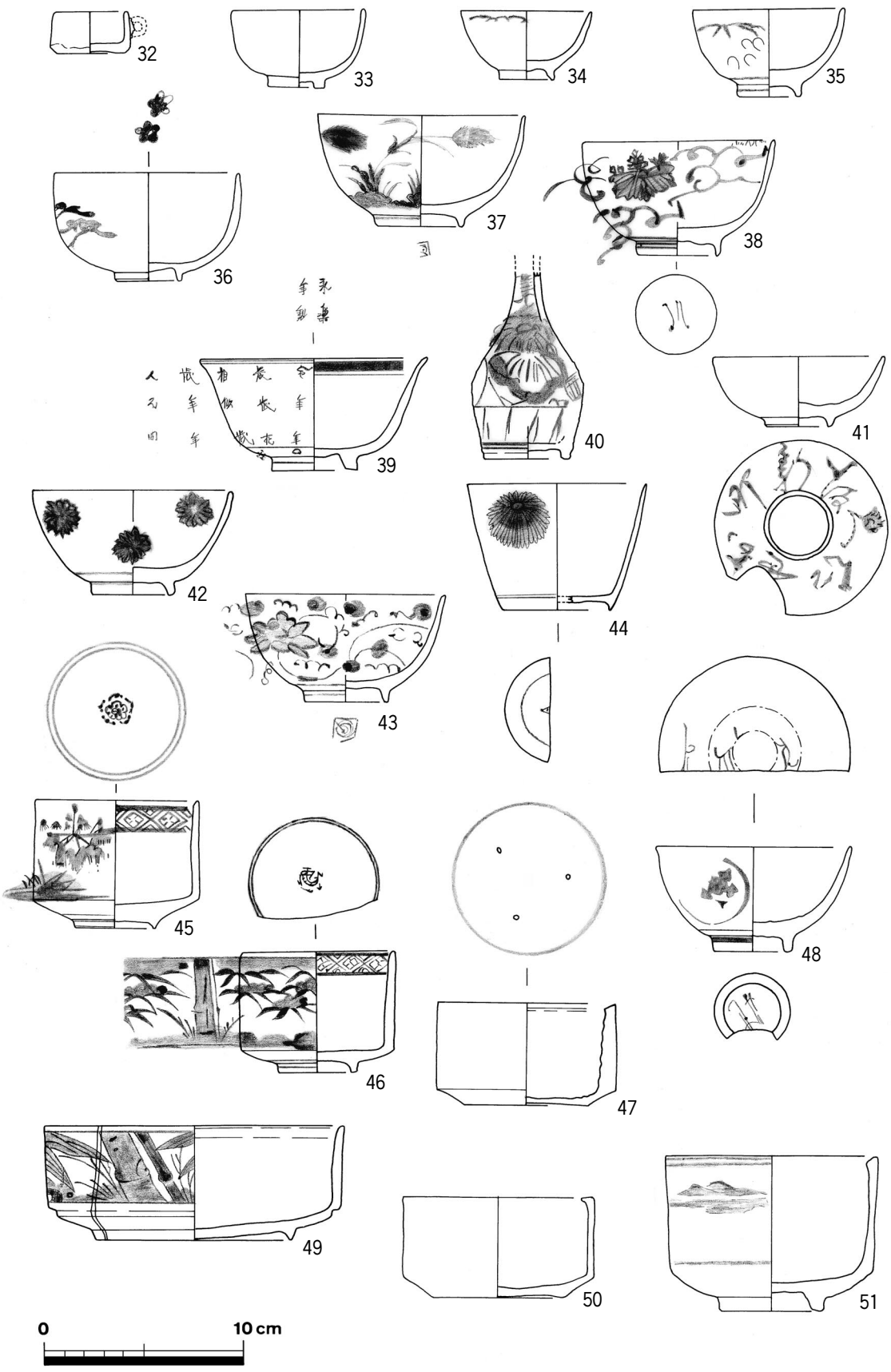


図11　狭山藩陣屋跡05－１区　出土遺物実測図（４）

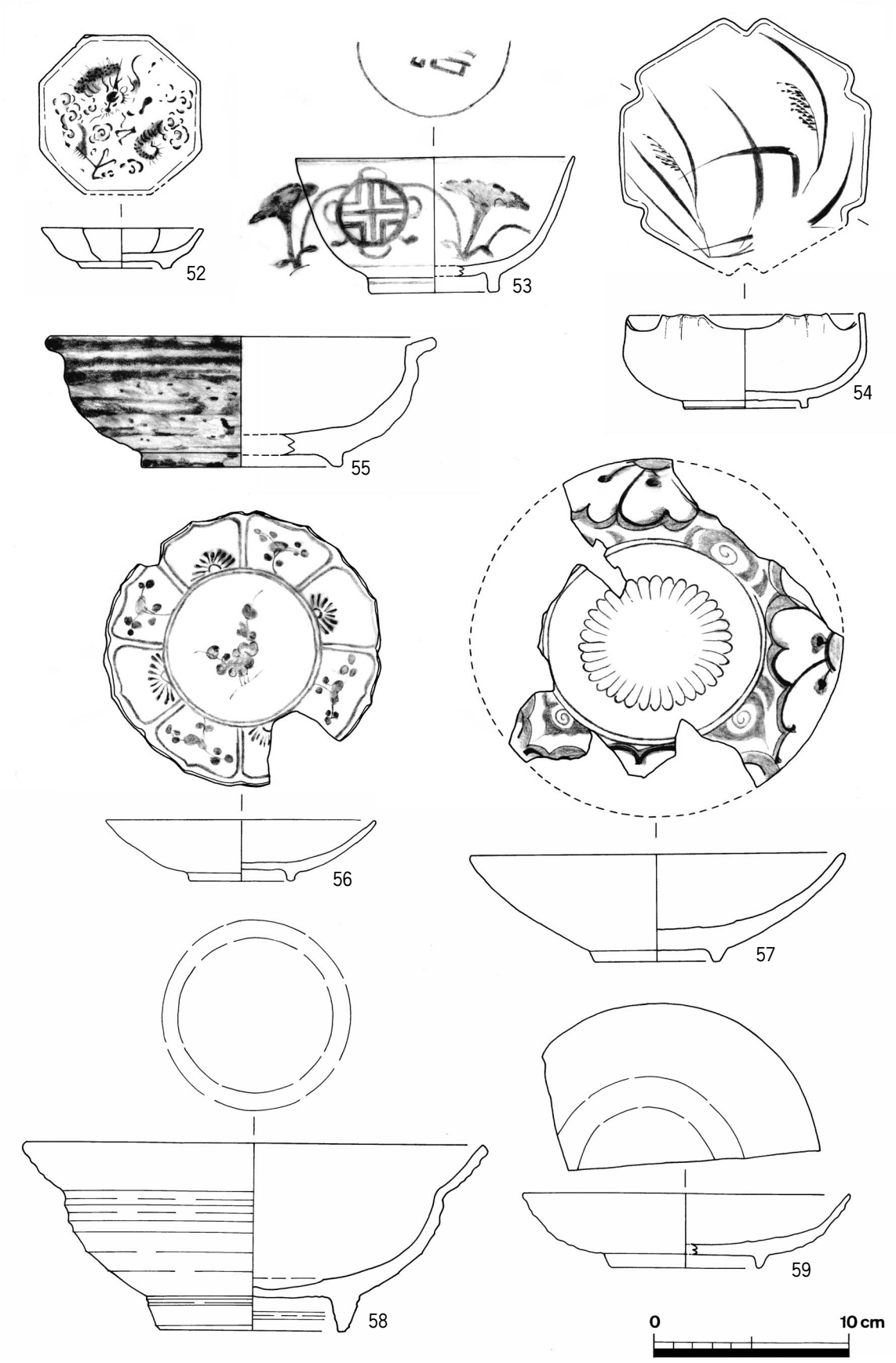


図12　狭山藩陣屋跡05－１区　出土遺物実測図（５）

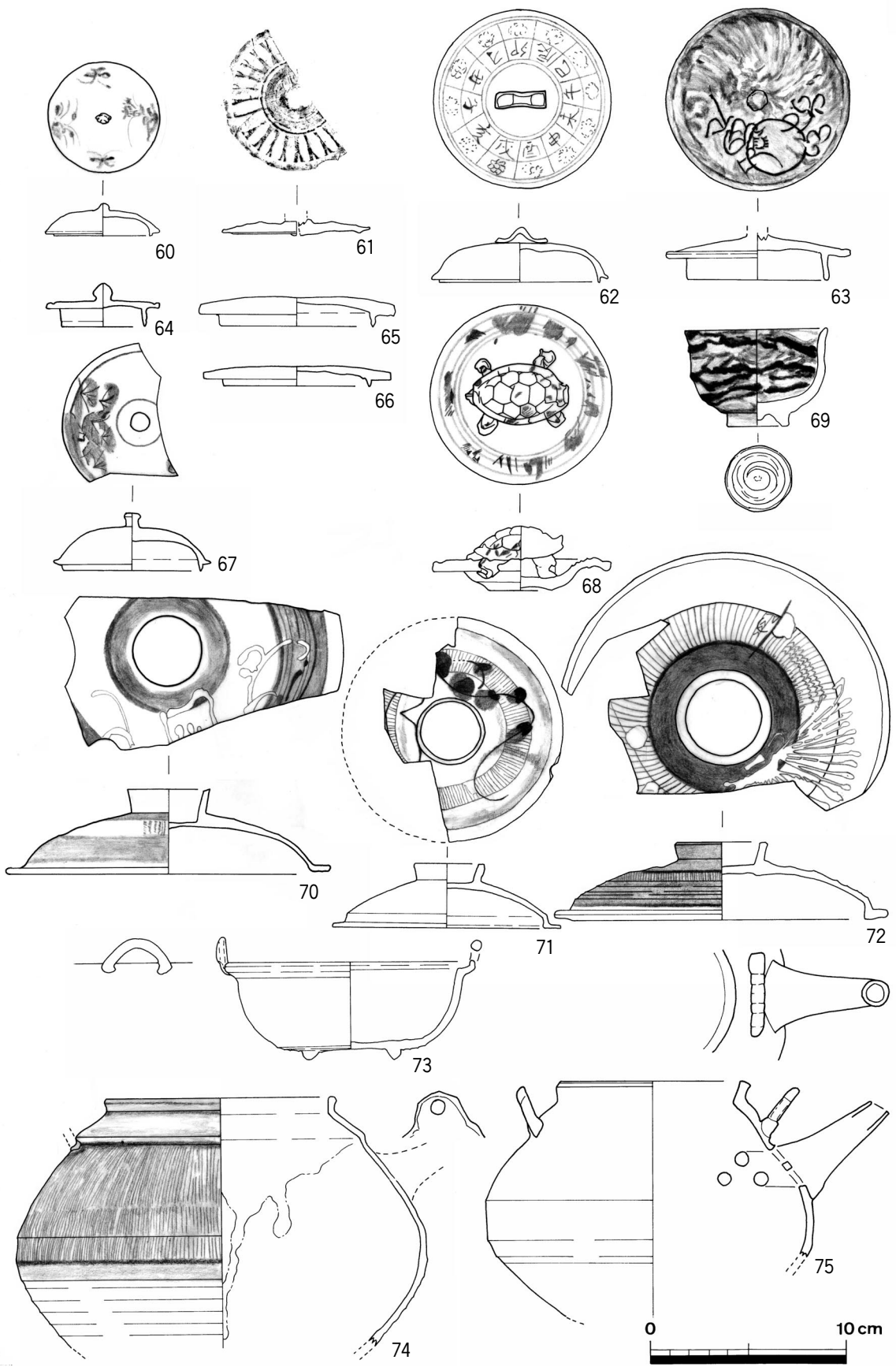


図13　狭山藩陣屋跡05－１区　出土遺物実測図（６）

図14　狭山藩陣屋跡05－１区　出土遺物実測図（７）

表1　出土遺物観察表

図面番号	写真番号	器　種	産地など	文様・調整など	器 高	口 径	そ　の　他
1		甕	信楽産	無釉・全体に褐色、四耳あり	残存高27.8	48	
2	6	火入れ	瓦質土器	縦断面三角形の五徳がつく	13.8	最大径25.2	底径25.2
3	29	焼塩壺蓋	土器		0.9	7.8	
4	30	焼塩壺蓋	土器		0.8	8	
5			土師器	内面に柿釉	0.6	5.8	
6		小皿	土師器	内面に柿釉	1.4	6.6	
7		小皿	土師器	無釉	1.1	7.4	
8		小皿	土師器	無釉	1.6	9.4	
9		小皿	土師器	無釉	1.7	10.3	
10		小皿	土師器	無釉	2	9	
11		小皿	土師器	無釉	1.8	10.4	
12		小皿	土師器	無釉	1.6	10.4	
13		小皿	土師器	無釉	1.5	10.5	
14		小皿	土師器	無釉	2.1	10.2	
15		中皿	土師器	無釉	11	11	
16		小皿	土師器	内面に柿釉	2	10.8	
17	9	焼塩壺蓋	土器		2.2	7.6	
18	10	焼塩壺蓋	土器		2.7	8.1	
19	8	焼塩壺	土器	「泉州伊織」銘あり	8.1	5.6	
20		火鉢か	土器				
21		手あぶり	土器		残存高8.9	残存径16.2	
22		ほうらく	土器		残存高6.3	29	
23		ほうらく	土器		残存高3.3	30.4	
24		ほうらく	土器		残存高4.5	32.8	
25	5	火鉢	土器	瓦質	15.3	18	最大径18.5、底径19.7
26	7	七輪	土器	内部に内輪、風口を最下部に設ける	18.1	20.4	
27		鉢	堺産	三足	6.2	17.4	
28	2	すり鉢	堺産		8.4	22	底径9.9
29	4	すり鉢	備前産		9.2	23	底径13.6
30	1	すり鉢	堺産		16.1	33.6	底径16.2
31	3	すり鉢	堺産		14.8	33.6	底径18.9
32	20	餌猪口	瀬戸美濃系陶器	底部以外は乳白色釉を施す。取っ手の痕跡あり	3.4	3.5	底径3.4
33	17		瀬戸美濃系陶器	底部以外に乳白色釉を施す。	4.1	6.6	高台径2.8
34		小碗(丸形)	肥前系磁器	外面に竹紋	3.4	6.6	高台径2.7
35	34	小碗(丸形)	肥前系磁器	外面に竹紋	4.4	7.6	高台径4.2
36		中碗(丸形)	京都産陶器	内面見込みに五弁花、外面に唐草の上絵付	5.4	9.2	高台径3.4
37		中碗(丸形)	肥前系磁器	底部接地部のみ露胎、外面に草花紋・麦紋	5.6	10.4	高台径4.4
38		中碗(丸形)	肥前系磁器	外面に桐紋のコンニャク印判と唐草紋、低部に字	5.7	9.6	高台径3.8
39	33	中碗(端反形)	肥前系磁器	内面見込みに「永楽年製」、外面に漢詩	5.6	11.4	高台径4.3
40	32	小瓶	肥前系磁器	外面に剣菱紋、唐草紋	残存高9.5		底径4.2

図面番号	写真番号	器　種	産地など	文様・調整など	器 高	口 径	そ　の　他
41		小碗	肥前系磁器	外面に「大坂新町出世仁」の字	3.5	8.6	高台径3.4
42		中碗(丸形)	肥前系磁器	外面にコンニャク印判で菊紋	10	5.2	高台径4
43		中碗(丸形)	肥前系磁器	外面に唐草紋・花紋、外面底部に略号	10	5.4	高台径4.2
44		蕎麦猪口	肥前系磁器	外面に菊花紋、腰輪高台	6.4	9	高台径5.4
45		中碗(半筒形)	肥前系磁器	内面口縁部に四方襷紋、見込みに五弁花、外面に桐紋、草花紋	6.5	8.2	高台径4.0
46	12	小碗(筒型)	肥前系磁器	内面見込みに五弁花、口縁部四方襷、外面に竹笹紋	6.2	7.6	高台径4.0
47	18	蓋物	瀬戸美濃系陶器	全体に透明釉を施す。無紋。無高台。底部に見込目あり。			
48		中碗	肥前系磁器	内面見込み内輪ハゲ、見込みに唐草紋、外面に五弁花のコンニャク印判、底部に略号、高台接地部に砂目。	5.3	9.8	高台径3.8
49	31	段重	肥前系磁器	外面に竹紋、　内面は無紋	5.7	15	高台径9.8
50	15	鉢(蓋物)	瀬戸美濃系陶器	底部以外に灰釉を施す。無紋	9.6	5.1	底径6.6
51		中碗(筒形)	京都産陶器	低部は露胎。それ以外は灰色釉を施す。外面に山水紋。	7.8	10.6	高台径4.5
52		小皿	肥前系磁器	内外面に青色釉を施す。内面に龍雲紋。	2.1	8.3	高台径4.7
53		大碗(丸形)	肥前系磁器	外面に〇に変形十字紋・あさがお花紋、内面見込みに文字（不明）紋	6.9	14.2	高台径6.6
54	19	中碗(六角)	瀬戸美濃系陶器	内外面に橙色釉を施す。内面見込み部に稲穂紋、外面無紋。6箇所に切り込みをいれる。	12	6.2	高台径6.2
55		中碗(浅丸形)	産地不明陶器	全体に白濁釉を施す	5.7	20	高台径10.2
56	36	小皿	肥前系磁器	内面見込みに花紋、外周を8区画し菊花紋、梅花紋を描く。外面は無紋。	3.9	13.4	高台径5.2
57	11	中皿	肥前系磁器	内面見込み（無釉）に菊紋・外周に花紋、外面に草花紋	5.6	19	高台径6.2
58		中鉢	瀬戸美濃系陶器	高台部以外に柿色釉を施す	9.6	24	高台径11
59		中皿	肥前系磁器	内面見込みに内輪ハゲ、高台接地部に砂目、無紋	3.8	16.6	高台径7.6
60	35	蓋物(蓋)	肥前系磁器	身との接着部のみ露胎、外面4箇所に蝶紋	1.7	5.8	つまみ径0.8、高さ0.4
61		土瓶(蓋)	備前産	上面を連弁状に削る。つまみの痕跡あり	残存高0.8	7.6	
62	14	蓋物蓋(丸蓋)	肥前系磁器	つまみは橋形。染付けで十二支文字と花紋を描く。	2.8	2	受け部径9.0、つまみ高さ0.8
63		土瓶蓋	(産地不明)陶器	上面に白濁釉を荒く塗り、その上に鉄釉で花紋を描く、内面は無釉。つまみの痕跡あり。	残存高2.4	最大径9.4	
64		土瓶蓋	京都産陶器	上面には灰釉をほどこす。内面は無釉。無紋	2.2	4.2	つまみ径1.0、高さ0.9

図面番号	写真番号	器　種	産地など	文様・調整など	器 高	口 径	そ　の　他
65		蓋物(蓋)	瀬戸美濃系陶器	上面に透明釉を施す。内面は無釉	1.5	7.8	
66	16	蓋物(蓋)	瀬戸美濃系陶器	上面に透明釉を施す。内面は無釉	1	7.4	
67		蓋物(蓋)	肥前系磁器	上面に松紋	2.9	最大径8.0	
68	21	蓋物(蓋)	京都産陶器	落とし蓋。つまみの部分が亀の形。	3.3	9	
69		小碗(猪口)	(産地不明)陶器	内面には灰釉、外面は素地の上に白濁釉、鉄釉で格子目を描く	4.9	7.2	
70		土鍋(蓋)	瀬戸美濃系陶器	上面には柿色釉のほか一部露胎部をのこし白釉で文字を描く。	4.3	16.6	
71		土鍋(蓋)	瀬戸美濃系陶器	上面一部鳶カンナ削り、草花紋を描く	3.3	11.6	
72		土鍋(蓋)	瀬戸美濃系陶器	外面は鉄釉をかけ一部鳶カンナ削り、白釉で蝶紋、花紋を描く	4	17	
73		土鍋	京都産	内面、外面上部は鉄釉、外面底部は無釉、取っ手２箇所がつく	6.2	12.8	底径3.4
74		急須	瀬戸美濃系陶器	外面に鉄釉を施す、外面カンナ削り	残存高12.8	11.6	
75	22	土瓶	瀬戸美濃系陶器	外面に鉄釉を施す	12	9.6	
76	24	土人形 (虚無僧)	土製品	無釉、底部には孔なし、	6.4	幅2.1	
77	37	土人形 (女性立像)	土製品	無釉、底部には孔をもつ、	残存高6.7	幅3.5	
78		土人形(猿か)	土製品	前面に緑釉	残存高3.4		
79	28	土人形 (天神像)	土製品	無釉、左右型合わせ	残存高2.5	残存幅4.2	
80	27	土人形(鳥)	土製品	無釉、前後型合わせ	3.5	長さ4.5	
81		土人形(鳥)	土製品	無釉、左右型合わせ	残存高4.3		
82		紅猪口	肥前系磁器	全体に白磁釉、	1.2	4.2	底径1.6
83	23	土人形(犬)	土製品		残存高6.4	残存長9.4	
84	26	土人形 (うさぎ)	土製品	中空、上下型合わせ	残存高2.8	残存長4.5	
85	25	鳩笛	土製品	中空、左右型合わせ	残存高5.7		

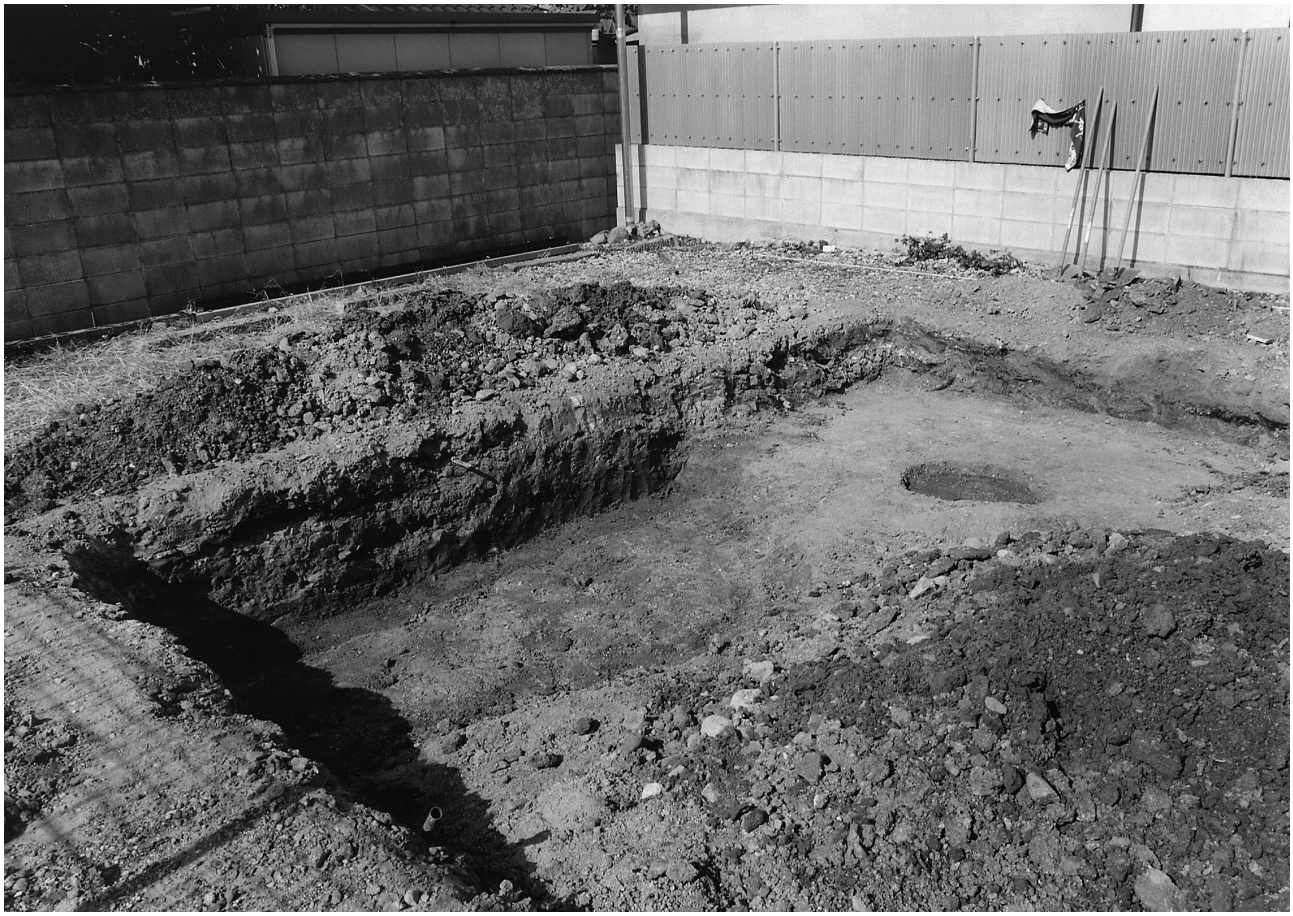
報 告 書 抄 録

書　　名	大阪狭山市内遺跡群発掘調査報告書16
副 書 名	
シリーズ名	大阪狭山市文化財報告書
シリーズ番号	33
編 集 機 関	大阪狭山市教育委員会
所 在 地	大阪府大阪狭山市狭山一丁目2384－1
発行年月日	西暦2006年３月31日

ふりがな 所蔵遺跡名	ふりがな 所　在　地	コード 市町村	北緯	東経	調査区	調査面積 (㎡)
さやまはんじんやあと 狭山藩陣屋跡	おおさかふおおさかさやましさやま 大阪府大阪狭山市狭山	27231	34度 30分 15秒	135度 33分 30秒	05－１区	３５
いけじりしろあと 池尻城跡	おおさかふおおさかさやましはんだ 大阪府大阪狭山市池尻中	27231	34度 29分 15秒	135度 33分 22秒	05－１区	１０

所収遺跡	種　別	主な時代	主な遺構	主な遺物
狭山藩陣屋跡	城館跡	江戸時代	05－１区 溝	05－１区 磁器碗・土人形・ほうらく・すり鉢・火鉢・焼塩壷
池尻城跡	城館跡	江戸時代	05－１区 落ち込み	05－１区 磁器碗・ひょうそく

図　　版



a　調査区全景

b　落ち込み遺構

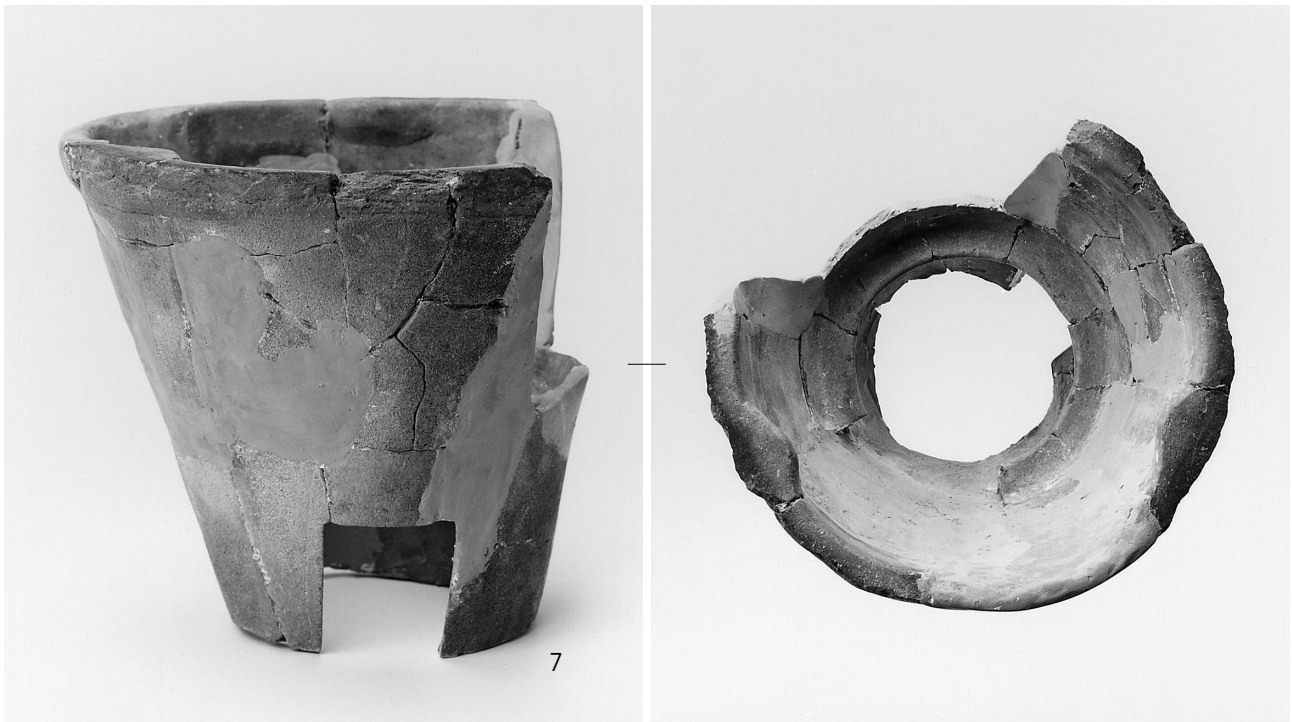
a　調査区全景

b　溝の肩部

a　すり鉢

b　すり鉢

a　火鉢



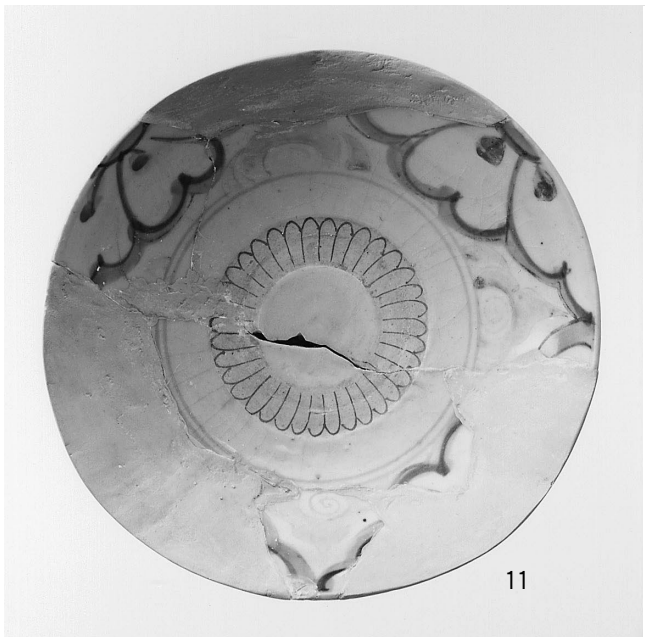
b　七輪

8

9

10

a　焼塩窯


11

12

13

14

b　磁器

15

17

18

22

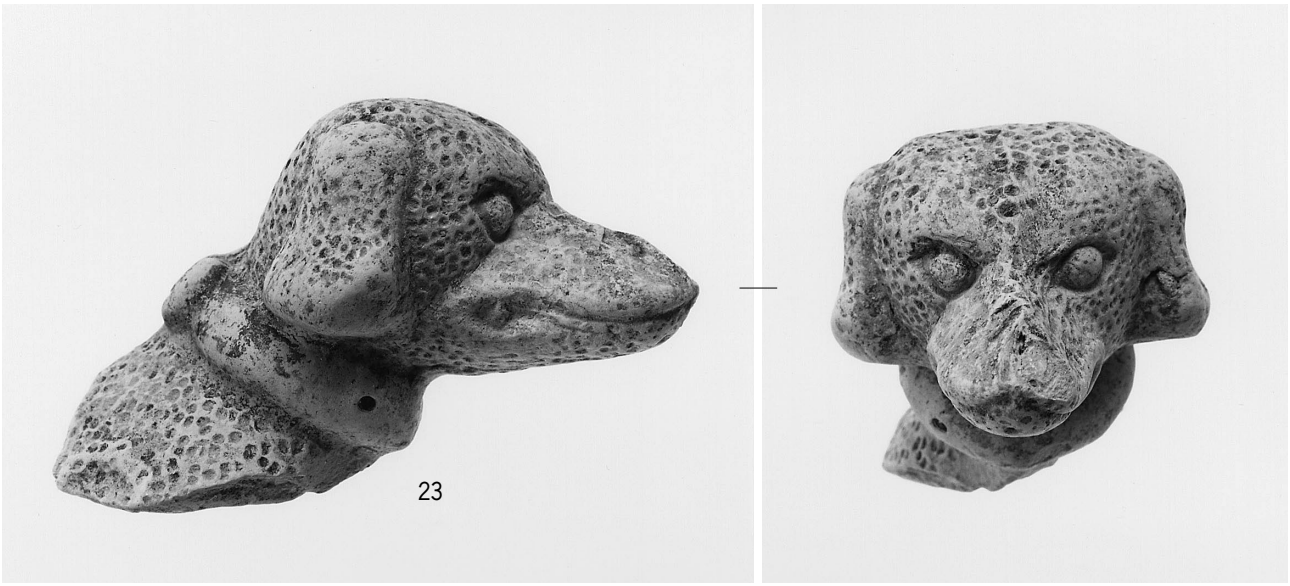
19

20

21

16

陶器


23

24

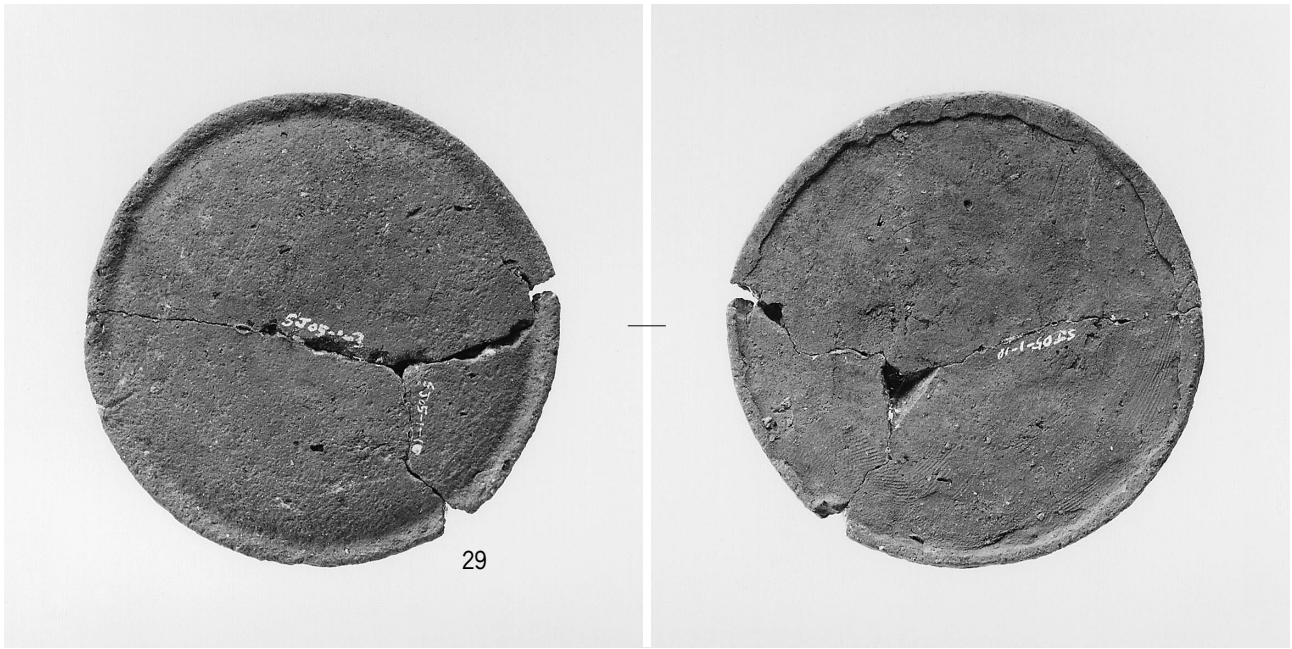
37

25

26

土人形

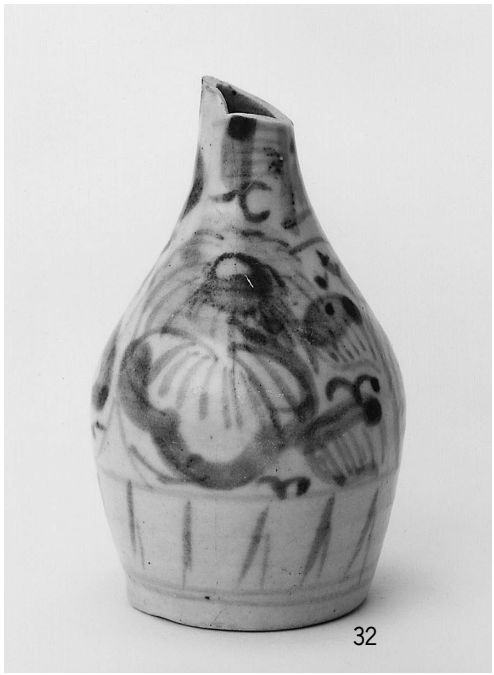
a　土人形

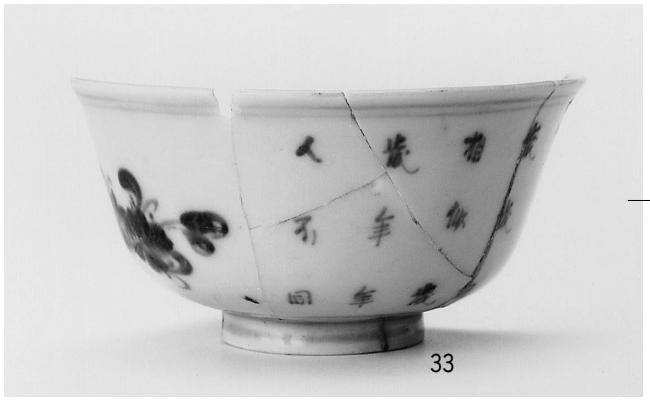


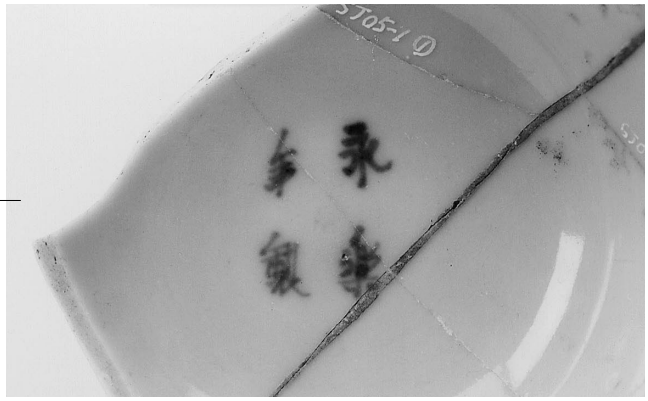
b　焼塩壷ふた

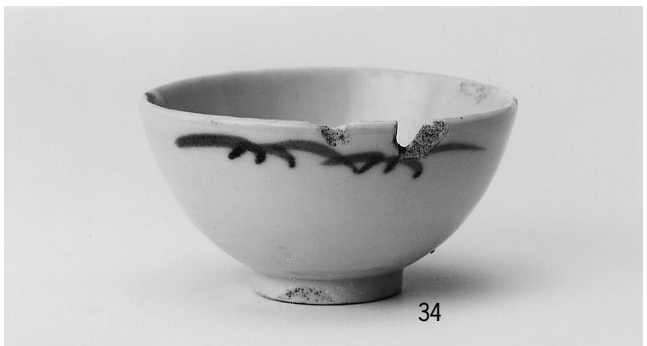
c　焼塩壷ふた

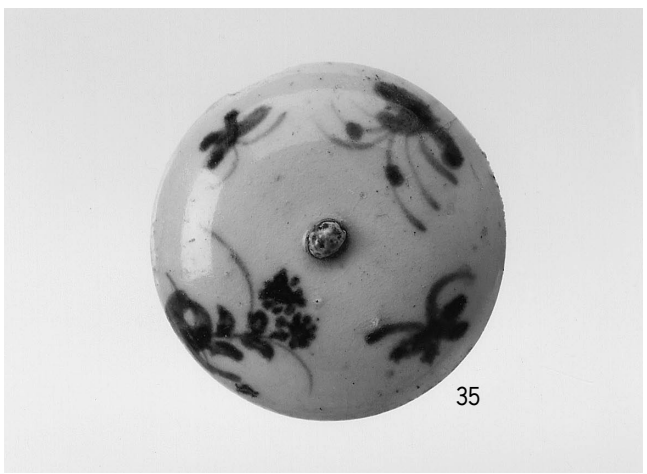
31


32


33




34


35

36

磁器

大阪狭山市文化財報告書33

大阪狭山市内遺跡群
発掘調査概要報告書 16

発　行　日　　平成18年(2006年) 3 月31日
編集・発行　　大阪狭山市教育委員会
印　　刷　　橋本印刷株式会社